

2024年

6月26日

第762号 隔週 隔日発行

(株)高齢者住宅新聞社  
東京都中央区銀座 8-12-15  
03-3543-6852(編集部)  
発行人 網谷敏政  
年間購読料 23,100円

# ロボット導入 国民性で差

## ドイツ有識者と意見交換



▲前列右：アルムート・ザトラパ・シル博士、前列左：コーディネーターの筑波大学本澤日代子名誉教授、後列は右より長嶺堅二郎代表、垣内イスズ代表

ドイツの産業機器メーカー、ロボット・ボッシュ社の筆頭株主であるロボット・ボッシュ財団の元看護部長で、現在は回国で保健・社会サービスのコンサルタントなどとして活動するアルムート・ザトラパ・シル博士が2024年5月26日から6月3日まで来日し、関西の高齢者介護の現場やATCエイジレスセンターなどを視察した。その様子の一部を本紙記者も取材、日本の介護の印象などについてインタビューした。

「人間とは何か」を問われる問題に

5月31日は、高齢者

住宅運営コンサルタントなどを手掛けるC Sねっと企画（大阪府寝屋川市）の長嶺堅二

関西

郎代表と、介護人材教育研修事業会社あ人財アカデミー（大阪市）の垣内イスズ代表が、それぞれ日本の介護業界における「ICT・ロボット活用」「人材確保・育成」の取り組みや将来像などについてレクチャーを行なっ

た。これに対して博士からは「移乗介助による介護スタッフの身体への影響ほどの程度深刻なのか」「ロボットの導入は、介護事業所にとって負担ではないのか」「日本のロボットメーカーとドイツ企業

生活することで、癒しや認知症予防などの効果も期待できる」「将来は、利用者一人ひとりの性格や既往歴、人生経験などを入力することで、ロボットがその人にあったサービスをカスタマイズして提供できるようにするの

## ボランティアの量確保が課題 フランクな多世代交流に興味

長嶺代表は、「日本では、13年から国として介護ロボットの導入に力を入れ始めている」と述べ、介護現場で実際に導入されているロボットの事例や、ロボット導入に際しての補助制度などを解説

た。その連携事例はあるのか」などの質問が飛んでいた。また、今後の介護現場でのロボット活用について、長嶺代表は「公助・共助・互助・自助に『ロボ助』という言葉が新たに加わるかもしれない。ロボットと

ではないか」とコメントした。それに対し博士は「ロボットがその人のケアについて自律的に判断してしまうと、ロボットが人間をサポートするのはなく、ロボットが人間を支配してしまうことにならない

だろうか。『人間とは何か』という根本的な問題にも関わっているとと思う」と懸念を示した。

## 外国人労働者で 介護人材は充足

続いて垣内代表が日本の介護人材を取り巻く環境について「人材不足が課題。特定技能など外国人人材に対する期待も高まっているが昨今の円安もあり、来日希望者が減っていくことが懸念される」と説明。

また、日本の介護人材の法定研修制度について「あくまでもこれは最低水準の研修に過ぎない。これ以上の研修、例えば管理職のマネジメント研修を実施している事業所は、個人的な感覚では1割程度であり、まだまだ十分とは言えない」との現状を示した。

これに対し博士は、ドイツでは外国人労働者が多いため、看護師はともかく、介護職については比較的必要数を充足できていると説明。「しかし、言葉の壁はどうしても存在する。『聞く』『話す』はできても『書く』『読む』がネックになっている」と日本と同様の課題が生じているとコメントした。

## ロボットに対し 親近感が少ない

最後に、今回の日本視察の印象について尋ねたところ、以下のようなコメントが返ってきた。

「高齢化、若者の減少、経済の停滞など、抱えている課題は両国とも同じだと実感した。また、ドイツでは宗教的な背景もあってボランティア活動が盛んだが、今後、人口が減少していく中で、これまでと同様のボランティアの質や量を確保できるのか懸念される」

「日本の介護に関するICT技術の高さには感心した。しかし、ドイツ人はロボットに對しての親近感が少ない。そうしたメンタリティーを考へても、介護ロボットがドイツでもそのまま受け入れられるかという点では疑問だ」

「認知症の人は対人コミュニケーション充実が不可欠であると改めて実感した」

「いくつかの高齢者施設を視察したが、特に印象的だったのは『はっぴーの家ろっけん』。フランクな形の多世代コミュニケーションは、QOLの質という点で私の理想とするところ」